
6つの幸せの物語 『一緒にいられて、本当にうれしい』

Misho

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6つの幸せの物語『一緒にいられて、本当にうれしい』

【Nコード】

N7568R

【作者名】

Misho

【あらすじ】

この物語は、5匹の子犬とその母犬のメルがそれぞれの家族との関わりで見つけた幸せの物語。

始まりのはなし 登場人物（前書き）

始まりのはなしと5つの物語、合計6章で完結予定です。

ジャンルはなんていうんだろ…わかんないです^^；

始まりのはなし 登場人物

みやざわ
宮沢 章矢 あや

ペットショップを営む女性。メルの飼い主。

メル

章矢の愛犬の雌犬。捨て犬だったのを章矢に拾われた。血統書はないが、見た目から雑種と判断。

5匹の子犬のお母さん。

ななせ
七瀬 隆也 りゅうや

章矢とペットショップを営む男性。ジャックの飼い主。

ジャック

隆也の愛犬の雄犬。血統書つきの黒柴。

5匹の子犬のお父さん。

5匹の子犬

メルとジャックの子どもたち。それぞれ別の家に引き取られていく。姿はみんな似ているが、ちよつとずつ特徴がある。メスが3匹、オスが2匹。

それぞれ今回の話のキーパーソンとなる。

始まりのはなし

『里親 募集中』

章矢はそう書かれている掲示板に5枚の子犬の写真を貼った。

「きゆう……」

メルが章矢のそばにより、ちょっと心配そうに掲示板を見た。

「大丈夫よ、メル。この仔たちはきっと幸せになれるから。」

章矢はそつとメルを撫でた。

つやつやのメルの毛がふわふわと揺れる。

『そうね。この仔たちはみんないい子だもの。いい人にもらわれるわね。』

メルがそう言っているように章矢を見つめた。

「そうだね。メルとジャックの子供だもん。悪い子のはずはないよね。さ、ご飯にしよう！」

章矢はそうメルに話しかけて、キッチンに向かった。

「章矢！メル！」

後ろから元気な男性の声がした。

「隆也！ジャックも！これからご飯にするけど、一緒に食べる？」

「ああ！食べる！章矢の手料理最近食べてなかったからな。」

「じゃあ、メル、ジャックと遊んできなさい。私はご飯を作ってるわね。」

章矢はメルをジャックのもとに送り出した。

「できたわー！」

ご飯ができて、章矢は隆也とメル、ジャックを呼ぶ。

その声に反応して、元気によってくる1人と2匹。

章矢はみんなが来たことを確認すると手際よく料理をテーブルに運んだ。

メルやジャック、子犬たちのところにも食事を運ぶ。

子犬たちが元気に餌にたかる姿を横目に見ながら、メルとジャックはおとなしく待っている。

章矢はメルとジャックに指示を出し、最後によし、と言う。そうすると、2匹も行儀よく餌を食べる。

「さ、私たちもいただきますよ。」

「そうだな。いただきます」

「いただきます」

章矢と隆也もご飯を食べ始めた。

ご飯を食べ終わり、メルとジャックは室内の遊び場で遊び始めた。

「そういえば子犬たち、いよいよ里親に出すんだな。」

隆也が章矢に話しかけた。

「ええ。もうそろそろいい頃かと思って。」

章矢はそう返事をした。

「いい人にもらわれるといいな。」

「きっと大丈夫よ。みんないい子だもの。」

「そうだな。」

そうして会話は終わった。

そして夜9時ごろ、隆也とジャックは帰宅した。

章矢はこのペットショップが自宅なので、メルを寝かしつけ、自分もお風呂に入って眠った。

次の日、彼女のもとに子犬をもらいたいという人が現れた。

彼女は丁寧な対応をしたのち、子犬を譲っていった。

子犬を受け取った人たちはみんな笑顔になって、ペットショップから出た。

その日のうちに子犬はみんな貰われていった。

「メル、みんなすぐもらわれたね。」

『そうね。あの子たち、いい子でやれるかしら...』

メルはそういうようにペットショップの出入り口を見つめる。

「あの子たちは大丈夫よ。みんないい子だもの。」

そういうとメルは、そうね、というように章矢を見てその場を去った。

「そう…きっと、大丈夫。」

章矢はそっと微笑んで店に戻った。

始まりのはなし（後書き）

次はいよいよ1つ目のお話がスタートします

私は、あなたの笑顔が好き。

登場人物（前書き）

第1章です。

私は、あなたの笑顔が大好き。 登場人物

桜木 樹姫 さくらぎ いつき

有名アイドルグループ『Butterfly』のリーダーを務める女性。疲れからか笑うことは少ない。癒しを求めてアイリを飼いはじめる。

アイリ

5匹の子犬のうちの1匹の雌犬。体にハートの形の様な模様が付いているのが特徴。

樹姫の笑顔が大好き。

水無月 鈴菜 みなづき れいな

『Butterfly』のメンバーで、樹姫の幼馴染。
メロンの飼い主。

メロン

鈴菜の愛犬の雌犬。トイプードル。

朝倉 優良 あさくら ゆうり

『Butterfly』のメンバーで、グループの中では最年少。
エルの飼い主。

エル

優良の愛犬の雄犬。シェルティ。

寺田 朱里 てらた しゅり

『Butterfly』のメンバー。本人いわく、元気だけが取り柄。

ユウの飼い主。

ユウ

朱里の愛犬の雄犬。ボーダーコリー。

私は、あなたの笑顔が大好き。 1

「樹姫ちゃん、終了です！」

「ありがとうございます。」

樹姫はスタッフに深々と頭を下げた

「樹姫、良かったよ。」

鈴菜が声をかけてきた。

「鈴菜…ありがとうございます。」

素直にお礼を言う。だけど彼女の顔は笑っていない。

「いい加減…心開いたらどう？」

優良に言われた。

「心なんか、とつくに開いてるわ。別にあなたたちを信頼してないわけじゃない。」

樹姫は静かに言い放った。

「…別にかまわないけど…」

優良は引き下がった。

「…じゃあ、先に帰るから。」

樹姫はそう言って部屋から出て行った。

「…樹姫ちゃん、どうしてあんなになったのかな？」

朱里が聞くと鈴菜が答えた。

「彼女、出会ったときからあんなだったのよ…。だから私にもわからないな。」

「…そっか。」

朱里はがつくりと肩を落とした。

「気にすることないのよ。あれが彼女のスタイルだから。いつか彼女も笑顔になるわ。」

鈴菜はちよつと悲しそうな笑顔で答えた。

「はあ…。」

樹姫は一人、家への道を歩いていた。

しばらく歩いた彼女は、ふと足をとめた。

「あれ？此処のペットショップ…。」

彼女はいつも夜遅くにしかこの道を歩かなかったので、ペットショップの存在に気づいていなかった。

彼女の目に入ったのは、『子犬の里親募集』の文字。

彼女はペットショップの中に吸い込まれるように入って行った。

「いらつしゃいませ。」

店員の女の子、章矢が明るく迎えた。

樹姫はちよつと戸惑ったが、子犬のことを聞いてみた。

「あの、子犬の里親って…。」

「ああ、子犬見ます？」

章矢はふわつと笑って言った。

「みんなかわいい子ばかりですよ。」

そういつて章矢は子犬の入ったかごをとりだした。

「わぁ…！」

樹姫はかごの中身を見て、目を輝かせた。

「気に入った仔がいたら言ってください。」

そういつて章矢はかごを置いた。

樹姫は、正直5匹も子犬がいるとは思わなかった。

樹姫はそつと手を出す。

一応、Butterflyの他のメンバーは犬を飼っているので、犬を触るときの基本くらいはわかっている。

すると、子犬たちがみんなこっちによつてきた。

くんくん、と彼女の手のにおいをかぐと、子犬たちは彼女の手にすり寄つてきた。

「あれ…？」

彼女の手が一番くっついてい子犬の体にハートの模様があることに気付いた。

樹姫はそつとその仔を抱っこして章矢に聞いた。

「この子つてもともとこんな模様がついてるんですか？」

章矢はにっこり微笑んで答えた。

「ええ。そうですよ。因みに雌犬です。」

樹姫が子犬に視線を向けると、子犬は笑っているような顔をして樹姫の方を見た。

そしてすぐに彼女は言った。

「この仔がいいです！この仔、もらえますか？」

章矢はうれしそうな顔をして言った。

「もちろんです。お客様、犬を飼われるのは初めてですか？」

「はい。」

「じゃあ、こちらへどうぞ。」

樹姫は、カフェの席に誘導された。

章矢は、一度奥に行つてマニュアルとお茶を持ってきた。

「どうぞ。」

章矢からお茶を渡された樹姫はそのままお茶を一口飲んだ。

「…美味しい！」

それは、ただのお茶のように苦味は少なく、やわらかい口当たりだった。

「うちの特別ブレンドです。私が作ってるんですよ。」

章矢が少し自慢げに言った。

「すごいですね！ホントに美味しい…」

樹姫はお茶の味に夢中になっていた。

「おかわりありますからね。言ってくれたらだしますよ。では、本題に行きましょう。」

章矢はちよつと嬉しそくにマニュアルを上手く使いながら犬を飼うときの基本を説明した。

章矢の説明がとてもわかりやすかったので、樹姫もリラックスして聞くことができた。

「——と、いう感じです。お客様の家はマンションですか？」

「あ、そうです。」

樹姫が答えると、章矢はにっこり笑って言った。

「基本の道具もお付けしますね。餌も今回はおまけでお付けします。」

樹姫は章矢の言葉に驚いた。

「いいんですか！？サークルとか、高そうなのに…」

「いえ、私はこの仔たちが幸せになれることを願っているのです。これくらいはさせていただきます。」

そして、再び章矢と話すこと1時間…

「では、これで説明は終わりです。」

「ありがとうございました。あの…」

「どうしました？」

「お名前聞いてもいいですか？」

章矢はちよつと驚いたような顔をしたが、すぐに笑顔に戻って答えた。

「宮沢章矢、21歳です。」

驚いたことに、章矢は樹姫と同じ年齢だった。

「私は桜木樹姫です。章矢さんと同じ、21歳です。」

章矢は樹姫の名前を聞くと、目を輝かせた。

「やっぱり、あのButterflyの樹姫さんだったんですね！」

「あ、うつすらわかってたんですか…」

樹姫はやっぱり、といった顔をした。

「また、お店に遊びに来てください！その時はお茶、サービスしますから。」

章矢はふわつと微笑んで言った。

「ええ、また来ますね。お茶も飲みたいし…」

めずらしく樹姫がうつすら微笑んで帰路についた。

『あの人、何か大きな悲しみを抱えているんじゃないかしら』

メルはそういう目で章矢を見る。

「そうかもね。彼女、なんだか笑うことをあまり知らないみたい……」
章矢はメルを撫でながらそう言った。

私は、あなたの笑顔が大好き。 2

「えっと…ここはこうで…」

樹姫は家に帰るとすぐに章矢からもらったマニュアル通りにサークルやトイレシートを組み立てる。

「きゅう…？」

すると、子犬が樹姫を見て尻尾を振った。

「ちよつとまってね。これできたら遊んであげるから——。」

樹姫ははつとした。そういえば、まだ名前をつけてなかった。

それに気付いた樹姫は、子犬の方に向き直った。

子犬は首をかしげて尻尾を振っている。

そのしぐさに樹姫はクスツと笑った。

「きゃんっ！」

子犬は笑った樹姫を見てうれしそうに鳴いた。

「名前…何がいいかな…」

樹姫はテーブルに目をやった。

そこには大好きなCDが置いてあった。

『ボクの帰る場所』という曲だ。

その曲の中で、樹姫は一番好きなフレーズを口ずさんだ。

「ボクは帰るところがある。愛する人がいる、あの里がある。」

愛する…里

彼女の頭の中に思いついた名前は一つ。

「アイリ…」

子犬はそれを聞くとうれしそうにその場でくるくると回った。

「あなたの名前は、アイリよ。よろしくね、アイリ！」

「きゃん！」

アイリはうれしそうに鳴いた。

「よし、じゃあ、続きをやらなくちゃ…」

樹姫は、再び作業に戻った。

私は、あなたの笑顔が大好き。 3

「アイリ、散歩行こう。」

樹姫がアイリを飼い始めて数週間：

彼女はアイリとの生活にも慣れたようだ。

今日もいつものコースで散歩をする。

しばらく歩くと、アイリはコースの途中の公園で立ち止まった。

「アイリ…？」

アイリは公園の中へ行きたがった。

樹姫は公園に入ることにし、アイリを抱き上げて公園の中に入った。

公園の中には、大きなドッグランがあった。

「すごい…こんなところあったんだ…」

アイリは早く中に入りたそうにしている。

「そんなに焦らなくてもいいわよ。ほら！」

そつとリードを外す。

するとアイリは、うれしそうに樹姫の顔を見て走り出した。

「いまいくよ！」

樹姫もアイリについていく。

アイリはそばにいた他の犬たちと仲良く遊び始めた。

樹姫は、ちよつと顔を伏せてそばのベンチに座った。

楽しそうに走り回るアイリを見て、樹姫は微笑んだ。

アイリは、樹姫が笑っていることに気付くと、そばに寄ってきてうれしそうにとびはねた。

「元気いいねえ。アイリ。ほら、遊んできな。私は此处で見てあげる。」

樹姫がそういうと、アイリはまた他の犬の方に向かった。

「樹姫…？」

此処に来て30分くらいたつたころだろうか。

後ろから聞きなれた声がした。

「鈴菜！なにやってるの？此处で…」

「私はメロンの散歩だけど…。何って、こっちが聞きたいよ。」

「ああ、私はアイリの散歩中…」

「アイリ？」

そういえばメンバーにはまだ言っていなかったんだっけ、と、樹姫は思った。

「この間から飼ってる子犬。おいで！アイリ！」

樹姫が呼ぶと、アイリはすぐに樹姫のところに来た。

「ほら、この子だよ。」

そういつて樹姫はアイリを抱き上げた。

「かわいいね！ほら、メロン、よろしくなさい。」

鈴菜がいうと、メロンがアイリに鼻を近づけた。

アイリはためらいなくメロンと鼻をつけた。

「フレンドリーなのね、アイリちゃん。」

鈴菜がアイリを撫でながら言った。

「そうなんだよね。もう、お散歩デビューしてからすぐ友達作つたのよ。」

樹姫が笑いながら言った。

「嘘…樹姫が笑った…」

鈴菜が少し驚いたように言った。

「あ…私、笑ってた？」

「うん。すごく楽しそうに…」

「そっか。じゃあ、きつとアイリのおかげだね。」

樹姫は今までなら出さなかったようなしゃべり方をした。

「すごいね、アイリちゃん。私がこれだけ一緒にいても笑ってくれなかったのに…」

「なんかごめんね？心配掛けてた？」

「ちよつと…ね。小さい時から樹姫はあんまり笑わなかったから…」

「いろいろあつたからね…」

「またいろいろ？それ、いつになったら教えてくれるの？」

「時が来たら…ね。」

樹姫は少しさみしそうな顔をした。

アイリはその顔を心配そうに見上げた。

「じゃ、そろそろ帰るね。」

鈴菜とすっかり話しこんでしまい、少々時間を食ってしまったが、鈴菜が帰ると言ったので時間のことを思い出した。

「うん。じゃあね。」

そういつて鈴菜と別れた。

「アイリ、行こう。」

アイリにリードをつけ、再び歩き出した。

帰り道、アイリはずっと樹姫を気遣うように歩いた。

それに気付いた樹姫は、大丈夫よ、と笑う。

アイリはほっとしたようにまた前を向いて歩き出した。

私は、あなたの笑顔が大好き。 4

「いらっしやいませ！——あ！樹姫さん！」

樹姫はアイリを連れてペットショップへきていた。

「こんにちは、章矢さん！」

すると奥から大人の犬が出てきた。

「メル！どうしたの？ああ、自分の子が訪ねてきたから……」

章矢がメルを撫でた。

「あの…メルちゃんってこの仔——アイリのお母さんなの？」

「そうですよー！ここで働いてる人の飼い犬のジャックとの間にできた子なんです。」

章矢が声を弾ませる。

「へえ…そうだったんだ…」

と、樹姫はアイリのリードを外し、メルの方に向かわせた。

「アイリちゃんかぁ…いい名前もらったんだ…」

章矢が仲良く遊ぶ2匹を見て言った。

「私の大好きな曲からとったんです。愛する里でアイリなんです。」

「素敵な由来…メルは深い意味なかったからなあ…」

章矢が頬を掻きながら言った。

「——で、今日はどういったご用でしょうか？」

急に章矢が営業モードになる。

樹姫はアイリをふつと見て言った。

「そろそろ名前入りの首輪…買ってあげようかなって思ったんです。」

「

なるほど。ではこちらのタイプとこちらのタイプ、どちらがよろしいでしょうか？」

そう言って差し出されたのは、首輪の裏に名前や住所を入れるタイプのものと首輪にプレートがついていて、その裏に名前を入れるタイプ。

樹姫はプレート付きの方を手にとってアイリの首にかかる負担を考えた。

「こっちのほうがオシャレだけど、プレートの重さの分アイリに負担がかかるのよね…」

「まあ、そうなっちゃいますね…」

「なら、こっちにします。」

樹姫はプレートの付いていない方を指した。

章矢はこちらへどうぞ、と樹姫を首輪のコーナーに連れて行った。

「わあ…！」

首輪のコーナーに着くと、樹姫はその種類の多さに驚いた。

「当店ではカスタムタイプからプリントタイプまで、幅広く取り揃えています。」

章矢はちよつと自慢げに言う。

「じゃあ、この中からアイリに似合う首輪をカスタマイズしていいのね！」

樹姫は目を輝かせながら言った。

「もちろんです！」

章矢も笑顔で答えた。

樹姫はハートの小さいストーンを手にとった。

アクリルパーツなので軽くて負担にならないかと思ったのでさくら色とクリアの2つを取った。

そして、それに似合うベースを選ぶ。

クリーム色のアイリの体に合うものは…と一生懸命考えた末、薄い青のデニム地のものに決めた。

「素敵な首輪ができそうですね♪」

章矢が言うと、樹姫はちよつと照れたような顔を見せた。

「あの…アクリルストーンに字を入れたいんですけど…」

「いいですよ！ちょうどそのような道具を仕入れたところなのでテストも兼ねてやってみましょう！」

章矢の言葉に樹姫は首を縦に振った。

「む…難しい…」

樹姫は文字を彫る針を片手にストーンとにらめっこしていた。

「頑張ってください！私は住所の方を先に入れておきますね。」

「あ、ありがとうございます。」

樹姫はストーンに文字を彫りながら返事をする。

樹姫の一生懸命な姿に、章矢はちよつと笑いながら作業をした。

そしてあれから30分後――

「で…できたぁー！」

樹姫から声上がる。

「どれどれ…わぁ！きれい…」

それを見て章矢も驚きの声を上げた。

ストーンに刻まれた文字は、さくら色が「アイリ&イツキ」、クリアが「Forever Love」だった。

「では、こちらをこの首輪に取りつけますね。すぐ終わるので、せっかくだからアイリちゃん呼んできてあげてください。」

「わかりました！」

樹姫はうれしそうに小走りでアイリを迎えに行った。

「似合う、似合う！」

「かわいいですね！」

首輪をつけたアイリを見て、2人が興奮しながら言った。

「本当にありがとうございます。」

樹姫がお礼を言うと、章矢もうれしそうに言う。

「私も、いいものを見せてもらいました！すごく楽しかったです。」

二人の話がこのあと30分ほど続いたのは言うまでもない――。

店に入って何時間経ったのか、ようやく帰路に着いた樹姫とアイリ

。

アイリは新しい首輪をつけて、上機嫌だ。
そんなアイリを見て樹姫も笑顔を見せる。

「きゃんっ！」

アイリはそんな樹姫を見て、うれしそうに鳴いた。

「よかったねーアイリ！似合ってるよ！」

樹姫が笑顔で言うと、アイリは再びうれしそうに鳴く。

「さ、帰ろう！」

こうして樹姫とアイリの1日がまた終わっていく――

私は、あなたの笑顔が好き。 5

「樹姫ちゃん！やっぱり樹姫ちゃんだ！」

「朱里…」

桜木樹姫&桜木アイリ、散歩中に朱里とユウに遭遇しました。

「あれ、樹姫ちゃん犬飼ってるの？」

「この間ペットショップでもらってきたの。アイリっていうんだよ。」

樹姫がアイリを撫でながら言う。

そんな樹姫を見て、朱里はふふつと笑う。

「な…何？」

「いや…樹姫ちゃん、アイリちゃんといるとすごく幸せそうなもの。」

「そつか…そう見えるんだ…まあ、幸せだからしょうがないよねーアイリ！」

樹姫はアイリに笑顔で言った。

「うそお…樹姫ちゃん笑った…！」

予想通りの言葉が朱里から出た。

「アイリのおかげだね。」

「そつかあ…そーなんだあ…樹姫ちゃんの心をいやせるのは私たちじゃなくて家族だったんだね！」

朱里の言葉がなぜだか、樹姫の心に突き刺さった。

「あ…」

「樹姫ちゃん？」

「な…なんでもない…。私、用事思い出したから帰るね。」

そういつて、樹姫は朱里に表情を見せないように急ぎ足でその場を去る。

「じゃーねー！また明日スタジオでねー！」

後ろから朱里の声が聞こえたが、樹姫は振り返らずに家に帰った。

樹姫は家に帰ると玄関にしゃがみこんで頭を抱えた。

「な…なに？あの感じ…どうしよう…明日みんなに会えないよっ！」

「くう…？」

そんな樹姫を、アイリは心配そうに見上げる。

「いや…いやっ…！」

アイリは、体を丸めて震える樹姫にそっと寄り添う。

「さわらないでっ！」

樹姫は、思わず大きな声を出してアイリから離れた。
するとアイリはさみしそうに家の中に入って行った。

「あ…」

冷静さを取り戻した樹姫はリビングに入り、アイリを探す。

「アイリ…アイリー？」

しかし、いつものようにアイリは出てこない。

「アイリ…アイリっ？どこ？」

樹姫は部屋の中をひっかきまわしてアイリを探す。しかしアイリは見つからない。

ふと、ベランダへの窓が開いていることに気付く。

「まさか…！」

樹姫がベランダに出ると、そこには柵の隙間から身を乗り出したアイリがいた。

「アイリっ…！」

樹姫がアイリを抱き上げる。

「きゃんっ…！」

樹姫は一瞬、何が起きたかわからなかった。
アイリが樹姫に抱かれるのを嫌がったのだ。

「アイリ…！」

そのままアイリは部屋に戻ってケージの中へ。

「アイリにまで見捨てられちゃった、か…」

樹姫はそのままベランダから景色を見る。

その景色は、樹姫には滲んで見えた。

「やだ…私…」

樹姫は自分の目に手をやると、ぺたんと床に跪いた。

「う…うそ…」

樹姫は泣いてなんかいなかった。

景色が滲んで見えたのは涙のせいじゃなかったのだ。

「どうしよう…私…」

別に目が悪いんじゃないくて、ただピントが合わないだけなのだ。

その証拠に、遠くにあるものも近くにあるものもはっきり見えないのである。

「と、とりあえず病院よね。でもうまく見えないんじゃないかな…」

樹姫は部屋の中に戻ると、手探りで携帯を探し、記憶で覚えているボタンを押してメールを打つ。

『目がうまく見えなくなったの。病院行くの付き合ってもらえないかな。よかったら電話して。』

それだけ打って送信する。

「お願い、誰か…！」

樹姫は携帯をしっかりと握って机に突っ伏した。

私は、あなたの笑顔が大好き。 6

「いいいいいいいいいいいい！！！！」

樹姫が住んでいるマンションの共用廊下で、1人の女子が樹姫の名前を呼びながら猛ダッシュしている。

そして、すぐに樹姫の家のチャイムが鳴った。

「樹姫ー！ー！鈴菜だよー！ー！来たんだよー！ー！」

家の中で机に突っ伏して絶望感を抱く樹姫は、インターホンの受話器を取り、

「鍵開いてるから入っていいよ……」

と、言った。

がちゃん、と扉があく音がして、鈴菜が家の中に入る。

「うわっ！暗っ！」

樹姫は帰ってから電気をつけていなかったのだ。

そしてなにより、彼女からは負のオーラが出ていたのだ。

「鈴菜……」

樹姫はほとんど何も見えないその目で鈴菜を見つめる。

「大丈夫だよ、樹姫。私が傍にいるから。」

鈴菜が樹姫をそっと抱きしめる。

「鈴菜あ~~~~~！」

樹姫は久しぶりに感じる人間のぬくもりに、ただただ泣くことしかできなかった。

「よしよし。じゃ、病院行こうか。」

鈴菜に支度をしてもらい、2人は家を出た。

そして、誰もいなくなつたその家で、アイリだけが部屋に残る。

『樹姫…私にくらい、真実を教えてよ……』

アイリはそういうような顔で閉じた扉を見つめていた。

「メラノーマ……ですね。」

眼科で樹姫が言い渡された病名だ。

「メラノーマって…？」

「簡単に言っと、皮膚の細胞にできるガンで、皮膚ガンの一種です。」

「あの…皮膚ガンなのになぜ目に…？」

「転移したんでしょう。」

「転移…！？」

「ええ。おそらく、体のほかの部分で最初に発生したものが転移したと思われます。」

「そんな…直るんですよね！？」

「それは専門医に尋ねる必要があります。近くの皮膚科に連絡をとってみますので、そちらで詳しい診断を受けてください。」

「そう…ですか。ありがとうございます…」

そう言って、樹姫は診察室を出た。

「樹姫…」

「心配しないで、鈴菜。きっと…大丈夫よ。」

そして、近所の皮膚科に連絡が取れたようで、そっちに行けることになった。

「行こう、樹姫。」

鈴菜につかまってゆっくりと歩く。

「メラノーマという診断だったんですね。」

「はい…」

皮膚科についてすぐに、診察してもらえた。

「…心して聞いてください。」

「はい…」

「まず、メラノーマという診断は正しいでしょう。そして、目に転移したというの間違いなさそうです。そして、その根本となる悪性黒色腫は背中にあっただんです。」

「背中に…！」

樹姫は、普段背中を気にしたことが無かった。だから発見が遅れたのだ。」

「しかし、安心してください。入院して治療を受ければ、直りますよ。」

「そうですね。」

樹姫はほっとした表情を見せた。

「さて、桜木さんはご家族は…」

「すみません。いません。」

「そうですね。では連れの方にもう少し話があるのですが、桜木さんは入院の準備があるので治療室に移ってもらいましょう。」

「はい。ありがとうございました。」

「さ、桜木さんこちらにどうぞ。」

看護師さんにつれられ、樹姫は治療室に。

「さて…」

鈴菜を相手に、先生が話を始める。

「彼女にはあのように言いましたが、本当は彼女のメラノーマは末期まで進んでいます。こうなると、どんな治療をしても治る確率は極めて低いでしょう。」

「え…」

「末期まで進むと、この病気で生存率は10%になるんです。」

鈴菜ははっと息をのむ。

「そんな…！私はまだ樹姫と活動したいんです！お願いします。直してください！」

先生はそんな鈴菜を見て言う。

「彼女は都内の大きい病院に移します。あなたは彼女について、入院の準備をしてきてもらってもいいかな？」

「もちろんです。ありがとうございました…」

鈴菜は待合室に戻り、入院先の病院を聞くと、樹姫をまつた。

「鈴菜！」

「樹姫…。さ、帰って入院の支度しましょ！」

「そだね。あ、アイリ…」

「だいじょーぶ！私が面倒みるわ。」

「ありがとう、鈴菜！助かる〜！」

いつも通りにふるまう樹姫を見て、鈴菜は少し悲しくなったのだった。

私は、あなたの笑顔が好き。 6（後書き）

メラノーマという病気が出てきますが、これは本当に存在するものです。

しかし、この話は病気についての知識が薄い人間が書いていますので、必ずしも正しい症状・治療法などが正しいとは限りません。

私は、あなたの笑顔が大好き。 7

『次のニュースです。人気アイドルグループ、Butterflyの桜木樹姫さんが昨日未明、都内の病院に入院したとの…』
樹姫が入院した次の日。

鈴菜はいつものように明るい表情は見せなかった。

今、鈴菜はアイリとメロンの散歩中。

途中の電気屋で樹姫が入院したというニュースをやっていた。それをみてアイリが足を止めて鈴菜を見る。

「きゅう…」

「アイリ…樹姫が心配なの？」

アイリは下を向いた。

「樹姫は大丈夫よ。きっと、アイリのところに戻ってくるから。」

鈴菜は精一杯優しい言葉をかけたつもりだったが、アイリはやはりとぼとぼと歩く。

「アイリ…」

鈴菜はそんなアイリを見て、少しだけ険しい表情になった。

『私がすっかりしなくちゃ…』

そう思った時、鈴菜の携帯が鳴った。

マネージャーからの電話だ。

『鈴菜、今日3時から緊急会見やるんだ。今から来れる？』

「はい。メロンとアイリを一度連れて帰ったら行きます。」

『じゃあ、鈴菜のマンションの前に車とめておくから。』

「はい。失礼します…」

鈴菜は電話を切ると少し急ぎ足で家へ帰った。

「樹姫、出れるわね？無理しなくてもいいのよ？」

「いえ、大丈夫です。病気のことは自分の口から言わなきゃ。」
会見会場には樹姫の姿があった。

「樹姫！大丈夫なの？」

「鈴菜！優良！」

樹姫はいつもよりちょっと弱々しく声を上げた。

「樹姫ちゃん…」

朱里が心配そうに声をかけるが、樹姫は黙ってうなずく。

『大丈夫。』

樹姫の眼はそう訴えていた。

「時間よ。みんな。」

「はい。」

マネージャーに言われ、会場に入った。

私は、あなたの笑顔が好き。 7（後書き）

今日は時間が無かったので短めに。

私は、あなたの笑顔が大好き。

8

記者会見の会場がざわめく。

樹姫は、たくさんのカメラのフラッシュが光る中、メンバーと一緒に席に着いた。

記者やアナウンサーからたくさんの質問が飛ぶ。

『桜木さんはいつ病気になられたのですか？』

『何という病気なんですか？』

『飼い犬のアイリちゃんはどうされてるんですか？』

『目が見えなくなったというのは本当ですか？』

樹姫は、そんな質問にゆつくりと、静かな声で話した。

「私が今回かかった病気は、メラノーマと呼ばれる皮膚癌です。

いつごろかかったのかは気付きませんでした。気がついたのはつい先日です。

病院に行って診察を受けたところ、メラノーマとのことでした。

最初に背中にできた癌が、いろんなところに転移し、目にもうつったんです。

なので、私の眼はいま見えにくい状態にあります。

アイリは、メンバーの水無月鈴菜さんが預かってってくれています。」

その後も、さまざまな質問が飛び交う。

樹姫は表情を変えずに淡々と質問に答えていった。

そんな樹姫の顔は、なにかとてつもない悲しみを感じるような、そんな表情だった。

鈴菜も優良も朱里もそんな樹姫の顔を心配そうにただ見つめるのだった。

そして、会見も終わりに近づいたころ、こんな質問が出た。

『これからはButterflyの活動はどうなさるんですか？』

この質問が出た時、樹姫の顔が少し歪んだ。

「樹姫……」

メンバーが小さな声で問いかけても、樹姫はそのままの顔で静止している。

そんな樹姫の代わりに、優良が話し始めた。

「私たちは、4人でButterflyです。もし、樹姫がButterflyで活動できなくなったとしたら、私もグループを抜けます。」

そんな優良に、樹姫が顔を上げて顔を向けた。

デスクの下で、鈴菜が樹姫の手をそつと握り、隣にいた朱里の手も握る。

それを見た朱里は、自分の隣にいた優良の手を握った。

四人は少し顔を上げ、小さくうなづく。

そして、朱里が話し出した。

「私も、樹姫ちゃんがいなくなったらButterfly抜けます。もし、樹姫ちゃんじゃなくても、誰が抜けても私はそうします！だって、4人でButterflyだから。誰かがかけるなんてありえません！」

朱里は鈴菜と目を合わせ、鈴菜が話し出す。

「もちろん、私もそうします。何があっても私たちはずっと一緒にいる覚悟があります。だって、みんな大切な仲間だから！」

「みんな……」

3人の話を静かに聞いていた樹姫は少し頬を緩めて話し出した。

「私も、みんなに何かあったら絶対にそばにいます。だけど、私はButterflyでいたいから早く病気を治して、また活動再開させます！それまでみんなは3人で活動してもらってもいいですか？私は、みんながたまに私に会いに来て、仕事の様子を話してくれれば満足です！」

樹姫が3人の方を向くと、3人は強くうなずいて樹姫を見る。

樹姫は幸せそうな笑顔を作り、こういった。

「私は、みんなが大好きです！これからもよろしくね！」

会話が終わり、外に出た4人。

「樹姫…ありがとね。」

優良が言う。

樹姫は、静かに笑って返事をする。

「わたしこそ、ありがと、みんな…」

「ううん、私たちは樹姫がいれば…」

一瞬、時が止まる。

——
バタッ

樹姫が倒れた。

「樹姫ッ！？樹姫——ッ！！！」

鈴菜が叫ぶ。

「とにかく救急車…ッ！」

優良が救急車を呼ぶ。

「わ…私、マネージャーに電話するね！」

朱里がマネージャーに連絡をした。

『朱里？どうしたの？』

「樹姫ちゃんが…樹姫ちゃんが倒れた…」

今、救急車呼んでいます。」

マネージャーが少し声を荒げる。

『とにかく落ち着くのだよ！私はいま手が離せないから、これが全部終わったなら病院に行くわね。』

それまで…たのんだわよ！」

電話が切れる。

遠くで救急車のサイレンの音がする。

「樹姫…」

鈴菜が樹姫の手を握る。

「れい…な…」

樹姫がかすかに声をだす。

「樹姫、無理しなくてよかったのに…」

「大丈夫…。私は………」

そこで樹姫は意識を失った。

私は、あなたの笑顔が大好き。 9

都内のとある病院――。

鈴菜、優良、朱里の3人は樹姫が眠る病室の外の長椅子に座っていた。

『彼女の病気は、想像以上に進行が早いです。次に彼女が目覚ましたら、手術のことを話そうと思います。これ以上手術が遅れたら、命の保証は……』

医者言葉が3人の心に深く突き刺さっていた。

「樹姫…どうしてこんなになるまで…」

優良が震える声で言った。

「樹姫は…何をしたら喜ぶかな？」

鈴菜がまっすぐと壁を見つめて言う。

「鈴菜…ちゃん？」

朱里が不思議そうに鈴菜を見る。

「ほら、樹姫は此処から動けないんだから、私たちができること、してあげたいじゃない？」

鈴菜が朱里をまっすぐ見つめて言う。

「そうだね…だけど、何しよう…」

3人は黙って考えた。

考えること15分…

朱里が口を開いた。

「ねえ、アイリちゃんを連れてくる…っていうのは？」

それを聞いて、鈴菜が目を輝かせる。

「いいね！それ！ナイスアイデアだよ！」

しかし、優良はちよつと考え込んで言う。

「だけど…此処病院だよ？ペットは入れられないんじゃない？」

その言葉に朱里はそうか…と肩をすぼめたが、鈴菜は表情を崩さず

に言った。

「此処、中庭ならペット入れていいんだよね」

その言葉を聞いて、優良も朱里も笑顔になり、うなずいた。

「じゃあ、アイリのお散歩コースに此処を入れるわ。樹姫が起きたらいつでも呼べるように、かならず誰か一人は病室にいる…これで
どうかな？」

3人はうん、とうなずいて、そのまま廊下で眠り込んだ。

私は、あなたの笑顔が大好き。

10

「じゃあ…樹姫の様子見てきて？」

「わかった。」

鈴菜と朱里がアイリを連れて病院へ来た。

鈴菜はアイリを連れていたので建物の中には入れない。

なので、代わりに朱里に行ってもらったのだ。

『おねがい！樹姫…！』

鈴菜が強くこぶしを握りしめているのを、アイリはしっかりと見ていた。

『会いたいよ…もっと笑顔を見せてよ…！』

そう願うように、アイリは鈴菜の手の一点だけを見つめていたのだ…

少したつて、朱里が外に戻ってきた。

「樹姫ちゃん、起きてたよ！外出れるって！」

朱里の弾んだ声に、鈴菜の顔はぱっと明るくなる。

「きゃんっ！」

アイリも嬉しそうに声をあげた。

「アイリ、樹姫に会えるのよ！」

鈴菜が嬉しそうにアイリに語りかけた。

そして、優良が樹姫の車いすをおして病院から出てきた。

「鈴菜！アイリ…！」

樹姫は弱く、それでもはつきりと2人の名前を呼んだ。

アイリはその声に反応し、嬉しそうに樹姫に向かっていった。

「アイリ！」

樹姫は手を広げてアイリを待ちかまえている。

「きゃんっ！」

アイリもそれにこたえるように、されにスピードをあげて樹姫の方に向かって走った。

アイリはまっすぐ樹姫の胸の中へと飛び込んだ。

それに合わせて樹姫もギュッとアイリを抱きしめた。

「アイリ…ごめんね、ごめんね…！」

樹姫の頬には次から次へと涙がつたう。

「きゅう…！」

アイリはそんな樹姫の涙をぺロぺロとなめた。

「アイリ…くすぐりたいよお…」

樹姫は楽しそうに笑う。

『樹姫が笑った…！私はやっぱりこの顔が大好き！』

アイリはそう言うようにまっすぐ樹姫を見つめた。

「アイリ、大好きだよ。」

樹姫はもう一度アイリをギュッと抱いた。

「樹姫、そろそろ…」

優良が時計を見ながら言う。

「あ、そうだね。じゃあ、アイリ…またね。」

樹姫はアイリをそっと地面におろした。

アイリはまた会える？と首をかしげる。

「もちろん会えるよ。それで、絶対元気になるから！」

樹姫は生き生きとした表情でアイリに言った。

「鈴菜、朱里！今日はありがとね！」

樹姫はそう声をかけて病院内へと戻った。

優良が樹姫に付き添って病院内へ入る。

アイリはその2人の姿を見送り、満足げに鈴菜の方へ戻った。

私は、あなたの笑顔が大好き。

11

それはあまりにも突然だった。

樹姫と鈴菜・朱里・アイリが別れた3時間後。

鈴菜の携帯に着信があった。

それは、病院で樹姫に付き添っている優良からだった。

鈴菜は恐る恐る通話ボタンを押した。

「優良…？」

電話口からは、震える優良の声が聞こえた。

『い…つき…が…』

「優良？どうしたの？優良！？」

『樹姫が…集中治療室に…』

「えっ！？それってどういうこと！？」

『もう…樹姫が危ないの…もしかしたら…もう…』

携帯越しに優良が泣き崩れたのがわかった。

「と…とにかく私もそっちに行くからっ！朱里にも連絡して！」

鈴菜はそう言ったが、優良からは返事が返ってこなかった。

鈴菜はとっさにアイリを抱えて家を飛び出た。

「優良———！！」

鈴菜が病院に着いた時、朱里はもう先に着いていた。

鈴菜は、朱里に抱かれて集中治療室の前でうずくまっている優良を見て思わず息をのんだ。

鈴菜が見た優良は、もはや今までの優良とは違う、痛々しい姿をしていた。

彼女の美しかったロングヘアは無造作に切っており、信じられないほど短くなっている。

そして、彼女のそばの壁にはたくさんの血がこびりついていた。

彼女の手には包帯が巻かれていることを考えたら、きっと彼女は壁を

何度も殴ったのだろう。

「優良…大丈夫？」

そつと声をかけると優良は顔をあげた。

その顔は、たくさんの涙の跡とそれをぬぐった後で真っ赤になっていた。

「樹姫が苦しんでるのに…何もしてあげられないなんて…」

優良がまたドン！と壁を叩く。

「優良…」

「自分の無力さに腹が立つ…」

優良がドンドンと壁を叩く。そのたびに壁には血が付いた。

「優良…ッ！」

「彼女の気持ちもわかってなかったのに心開けて、無理言ってた…。私、最低だよね…」

「え…？」

優良は樹姫の過去を知っているの？

そう思った時、優良が口を開いた。

「樹姫が集中治療室に入る直前に言われたの。彼女の過去。みんなにも話せて言われたから…」

そう言って、優良が話を始めた。

私は、あなたの笑顔が好き。 12

優良はまっすぐ鈴菜の目を見て話を始めた。

「樹姫：小さい頃に両親を亡くしたんだって。」

その言葉から始まり、優良は淡々と樹姫の過去を話し始めた。

――樹姫が3歳のころ――

そのとき、樹姫は彼女の両親と3人で海に遊びに来ていた。

そして、自宅への帰り道――。

事故は起こった。

――桜木一家が乗った車が、大型トレーラーと衝突したのだ。

幸い、後部座席に座っていた樹姫は無事だった。

しかし、前に座っていた両親は即死だったという。

その後、樹姫は施設に預けられた。

しかし、それから10年――

彼女は通っていた中学で悪質ないじめを受けていた。

そして、施設でも孤立し、いつしか彼女の顔からは笑顔が消えていった。

そして、中学を卒業し、高校に入ったころ――

彼女が昔仲良くしていた唯一の友達、鈴菜と再会した。

しかし、鈴菜が樹姫と再会した時も彼女は笑わなかった。

2人とも、お互いのことを覚えていたが、昔の様子は忘れていたようだ。

なので、鈴菜は樹姫は昔からこうだったと思いこんで仲良くしていた。

そして、数年が過ぎ――

芸能事務所にオーディションで入った2人は、優良と朱里に出会った。

彼女たちが仲良くなるのに時間はかからなかった。
そこで、『Butterfly』を組んだのだ。
そして、今に至るという。

「樹姫…私…私が昔の彼女を忘れてなかったら…」

鈴菜が泣き崩れた。

「樹姫…ゴメン、ゴメンね…」

うずくまって泣く鈴菜を、優良と朱里が抱きしめた。

そんなとき、集中治療室の扉が開いた。

先生がゆつくりと出てくる。

「先生！樹姫は…どうなんですか？」

「桜木さんの手術は

私は、あなたの笑顔が大好き。

12（後書き）

次回、1章最終回です！

私は、あなたの笑顔が好き。 完結

あれから6年がたった。

「みんな！準備はいい？」

「もちろん！」

「じゃあ、行くよ！」

『ワアアアーーーーーッ！！』

此処は、東京ドーム。

あのとき集中治療室にいた樹姫は、病気を克服して今ここにいた。

あの手術は、成功していた。

しかし、彼女の気の持ちようで運命は変わっていたという。

あの日鈴菜がカバンに忍ばせて連れてきたアイリは、ちゃんと樹姫と向き合った。

手術後の病室で、こっそりと樹姫とアイリを話させたのだ。

もちろん、看護師さんや先生にばれることもなかった。

それから何日もアイリと鈴菜の病院訪問は続き…

3年前にようやく樹姫は退院して芸能界に復帰した。

それから、4人でずっと笑顔で活動してきた。

樹姫自身、メンバーに自分の過去を話してスッキリしたんだろう。いろいろな感情を見せるようになったのだ。

そして、今東京ドームで初めてコンサートを行っているのだ。

今日の彼女たちは、とびっきりの笑顔を見せていた。

それは、彼女たちの絆のおかげだと言える。

しかし、その陰には樹姫に笑顔を取り戻させたアイリがいる。アイリがいるから、今の彼女たちは幸せになったのだろう。

6つの幸せの物語 アイリ編完結。

私は、あなたの笑顔が大好き。 完結（後書き）

アイリと樹姫の絡みが妙に少なかったですね…

まあ、大目に見てやってください。

では、2章でお会いしましょう

ボクの一番の友達 登場人物

栄さかえ 優治ゆうじ

栄家の次男。彼が通う中学では友達がいず、心配した彼の親がソラをもらってきた。

ソラが来る前は、泰智が唯一の喋り相手だった。

ソラ

栄家にもらわれてきた雄犬。

他の4匹と比べやや体が大きめ。

栄さかえ 泰智たいち

栄家の長男。彼はすでに成人して独立しており、たまに家に帰ってくる。

優治の良き理解者。

栄さかえ 明美あみ

栄家の母親。友達がいらない優治のことを心配して、陽介と相談してソラを連れて帰ってきた。

彼女の仕事はイラストレーター。

栄さかえ 陽介ようすけ

栄家の父親。少々頼りなく、泰智が独立する前は泰智に説教を受けていたほど。

ソラの名付け親だったりする。

一之瀬いちのせ 歩あゆむ

優治に友達ができない原因は、彼が言う悪口だったりする。しかし、ツキとソラの関係から、彼の心は変わっていく…

ツキ

歩の飼い犬の雄犬。

ソラと仲がいい。

ボクの一番の友達 1

『優治、また負けたー！』
『お前、罰ゲーム！荷物
持ちな！』

『優治の負けだな』
『罰として、千円よこし
な』

嫌だ！お前らなんか…友
達じゃない！

ピピピピピピピ

目覚まし時計が鳴った。

「…嫌な夢だな…」

優治は重い体をおこし、着替えて1階へ下りる。

「おはよう優ちゃん！今日はよく眠れた？」

優治の母——明美が朝食を作りながら優治に声をかける。

しかし、優治は暗くぼそり、と一言

「全然。」

と、言った。

「そう…無理しないでね。」

明美はちよつと心配そうに優治を見るが、すぐに明るい表情に戻つて朝食を優治に出す。

今日の朝食は、スクランブルエッグにロールパンという、ちよつと

おしゃれな内容だ。

「いただきます！」

優治はちよつと声を張っていただきますをし、スクランブルエッグを口に運んだ。

「美味しい？」

明美が優治に問いかける。

「すっげー美味い。」

優治はちよつと頬を緩めて言った。

「良かった。」

明美はそういうと洗濯物を干しに行った。

優治は横目でその後ろ姿を見ると、再びスクランブルエッグを口に入れた。

「いつてきます。」

家を出た優治は、ふと携帯に目をやった。

『メール 1件』

優治が受信ボックスを開くと、そこには『兄貴』の文字。

——兄貴！

優治は表情を和らげ、メールを開いた。

『今日帰るよ。1週間くらいいるつもりだからよろしく。』

優治はそのメールを見ると、一人嬉しそうに学校への道を走った。

優治の兄——泰智は優治の良き理解者であり、話をた

くさん聞いてくれる。

だから優治は泰智にあこがれている。いつか、そんな大人になりたいと——

学校に着くと、優治はさつきまでの明るい雰囲気はなく、教室の自分の席に座りじっとしていた。

そして、黙々とノートにシャーペンを滑らせる。

そして、5分たったところにシャーペンを止めた。

ノートには、草原にたたずむ1匹の雄ライオンが描かれていた。

絵を描くこと

それは、一人でいることが多い優治の唯一の趣味だ。

優治は大雑把に描かれたその絵に細かく描き込みをしたり、修正したりしていた。

そして、予鈴が鳴るころに一人の男子生徒が登校してきた。

そしてその生徒は優治のそばに来た。

「優治、はよっ！今日もお絵かきか？いい加減、その女々しい趣味やめたら？」

「…はよ。俺は絵を描くこと、やめようとは思わないから。」

「優治、そんなんだから友達できないんだぜ！」

「歩！いい加減にしろよ。」

歩こと、一之瀬歩は優治に唯一かまってくるクラスメイトだ。

しかし、彼の言うこと一つ一つが優治を茶化すような言葉だった。

優治はふう、と息を吐くと、ノートを仕舞って前を向いた。

こんな感じで、優治は学校生活を送っている――

ボクの一番の友達 2 (前書き)

1ヶ月以上放置してしまつて申し訳ないです。

ボクの一番の友達 2

そして、その日一日の授業を終え、帰路についた優治。泰智が帰って来る日だったせいか、いくらか足取りは軽く思えた。兄ちゃんに会ったらどんなことを話そうか――

優治はそんなことを考えながら歩いていたのだった。

「ただいま」

家に着くと、「おかえり」と明美からの声が聞こえた。

そして、家の中に入ると――

リビングには泰智の姿があった。

「おかえり、優治」

泰智は笑顔で言った。

その顔を見たとき、優治の表情はパツと明るくなった。

「優ちゃん、お弁当箱出して」

明美に言われると、優治はいつもより明るく返事をする。

「元気そうで良かった」

そう言って泰智は優治の頭をクシャツと撫でた。

「まあな」

優治は笑ってそう言った。

「優ちゃん！お弁当箱出してって言ってるでしょ！」

明美の怒鳴り声が聞えたので、優治は急ぎ足でキッチンに向かった。その様子を、泰智は笑顔で見っていた。

その日の夜中――

優治と泰智が眠りについたころ、リビングには明美と陽介が向かい合って座っていた。

「あのね、優ちゃんのことなんだけど……」

明美が話を始める。

「なんだ？」

陽介が聞く。

「優ちゃん、学校で友達がいらないみたいなのよ…」

明美は、実は全部知っていた。

「それは自分でクラスメイトに近づかないだけじゃないのか？」

陽介はコーヒ―をすすりながら言う。

「その逆よ。向こうが近付いてくるんですって」

「ならなんで友達がいらないんだ？」

「優ちゃんが作れたがらないのよ。自分が絵を描いてるのをバカにされるからって…」

「…それなら友達なんか作らなきゃいいじゃないか」

「でも、そのせいで優ちゃんの話し相手は泰智しかいないみたいだし…」

「その泰智もたまにしか帰ってこないから…ってか？」

「…そうなのよ。だから、犬でも…飼おうかって」

「犬！？金がかかるんじゃないか？」

「この間ペットショップで里親探しをしている子犬がいたのよ。必要な道具なんかは私が揃えるから…」

「俺は構わないけど、第一誰が世話するんだ？お前か？」

「…それを優治にやらせようと思うのよ」
「…！！」

「そうすれば自然と情がわいて、心を開くんじゃないかと思って」
明美はそれしか方法がないと思った。なのでこの方法を提案したのだ。

「なるほど…じゃあ、飼ってみるか？犬…」

「ええ。そうしましょう！」

「ちょうど明日は休みだ。2人でそのペットショップに行ってみよう」

「そうね。サプライズの方がいいものね」

こうして、この家で犬を迎え入れることを決めたのである。

ボクの一番の友達 3

あくる日…

明美と陽介はペットショップの前にいた。

「本当に…飼えるか？」

陽介が心配そうな顔をする。

「大丈夫よ。最悪、私が飼うから」

明美は怖気づかずにペットショップに入ろうとする。

すると、ペットショップのテラスから若い女性が顔を出した。

彼女——章矢はニコツと笑い、会釈した。

「彼女…店員さんかしら？感じよさそうね。じゃあ、入りましょう」
そして、明美は陽介の腕をつかみ、店に入って行った。

「いらつしゃいませ」

先ほどの感じのいい女性——章矢が笑顔で迎えた。

「あの…子犬の里親を募集していると聞いたんですが…」

明美が聞くと、章矢はちよつとまってくださいね、と笑いかけて奥へ行った。

「どんな仔かしら…？」

「可愛い仔だといいな」

二人がそんな会話をしているうちに、章矢が奥から4匹の子犬を連れて出てきた。

張り紙には5匹とあるが、1匹引き取られたんだな、と明美は思った。

「どの仔がいいですか？因みに、こつちが雄でこつちが雌です」

章矢は子犬を性別で分けてかごに入れた。

明美と陽介は、じつとかごの中を覗き込んだ。
すると、1匹だけ少し体が大きい雄犬がいた。

「あの…こいつは元々体が大きいんですか？」

今度は陽介が聞いた。

「そうですね。しかも、食欲も旺盛でちょっと大変なんですがね」
ハハ、と章矢が苦笑した。

明美はそれを聞くなり言った。

「この仔にします。この仔を連れて帰らせてください」
さすがに、それには陽介も驚いた。

一番手のかかりそうな子犬を選んだからだ。

「世話とか…大変なんじゃないか？」

陽介のそんな意見にも聞く耳を持たず、明美はどんどん話を進める。
そして、ペットショップに入ってから数時間がたった。

「では、この仔のこと、よろしく願いします」

章矢が頭を下げると明美は、

「大丈夫よ！責任もって世話しますから」
と、明るく返事をした。

ペットショップから離れ、家に帰る途中…

「空が…青いわね」

明美がぼつりとつぶやいた。

「空…」

陽介が呟いたその直後。

「コイツの名前、ソラにしないか？」

普通の人なら、なんて安直な…と思う方もいるはずだ。
しかし、この両親は安直な人間なのか…

「いいわね！ソラにしましょう！」

と、ここでソラの名前が決定した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7568r/>

6つの幸せの物語『一緒にいられて、本当にうれしい』

2011年10月8日18時10分発行